

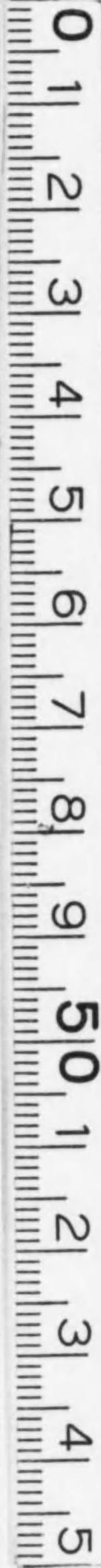
911.168
188
6

911.168-Y88-67
1200500755844

經 間 人



勇 井 吉



始



911.168
Y88
6

吉井 勇



歌集

人間經

角川書店



1013
155

目次

卷一
相模野の庵にありて詠みける歌……………九

卷二
おなじく相模野の庵にて詠みける歌……………七五



人間



卷三

さるところに假住居しける
頃詠みける歌……………101

卷四

さすらひの旅路にありて詠
みける歌……………107

卷五

土佐の國猪野々の里にて詠
みける歌……………101

吉井勇に寄す

引

うれしきは君が歌なるかな、更に
うれしきは幸に君と時を同じく生
きて若かりし日の君が歌を自ら
思ひ出の歌とし、また今日君が口
ずさめるもののやがてわれ等が今
日の歌なることなり。一夜美酒の
如き君が舊著と清水に似たる新作
とを併せ誦して感殊に深かりしを
もて、蕪詞を連ねて君に示し玉弁
を乞はんとす。君が一筆を博し得
ば望外なり。

友若くして若人が
心おごりを紅燈を
枕の下に流るてふ
祇園の水を咏めりしが
その酒ほがひはなやかに
若さのかぎりつくせしを
若さや昨まとなりけむにけむ
今武藏野に庵して
野末の風に夕雲に
世を憤り身を歎き

艶うつく隠いん者じやめく友の歌

ふかきあはれはいやさらに
きのふにまさるふせいかな
若き命をうたひては
若きわれらをよろこばせ
今また老の近き日に
歌聲とみに變りたる
君が歌こそいみじけれ
われはた老の近き身に

壬申秋夕

吉井詞宗
正

佐藤春夫

卷一

相模野の庵にありて詠みける歌

卷一

信濃國の風土記



ひとり生きひとり往かむと思ふかなさばかり
猛きおれならなくに

懐に錢の乏しきそれもよしこのころの貧をいかに
せましな

胸にうつる心の影をしみじみと眺めるほど
寂しきはなし

いささかは肩聲やかす癖つきぬ世にあらがひ
て生きてあるゆゑ
家にあれどなほ旅にあるこころしぬわが綻び
を縫ふひともなく

たはれをの名にあまんじて生きて來ぬ似非聖
のみ多きこの世に

いとけなき日の滋^{しほ}來て訴^{まを}へ泣く夢に目覺めぬ
秋の夜の二時

うつし世に住みどころさへあらぬ身が誰の胸
にか住まむとはする

あはれなる喜代子の歌に涙落つ男ごころも秋
は傷むや

白玉の指も細りてさふらふと書けるその字も
瘦せしあはれさ

おもひ出づ昔の友の誰彼と酌みたる酒の秋の
さむさを

ふと目覺む隔たりし世にあるひとが傍に來て
呼べるけはひに

死を思ひ留まりしのちの書置はあはれなりけ
りなきがらのごと

わが墓は小さきがよしとまづ書きぬ誰に送ら
むあてもなけれど

せめてわが一生のうちになだ一度命を賭くる
大事あらしめ

世をあげてわれを嘲ける時來とも吾子よ汝の
みは父をうとむな

かにかくに無頼の友もなつかしや淺草の夜の
酒をおもへば

あめつちの四季の秋には寂あれどころの秋
はただに冷たき

酒みづき無頼たはれをさまざまの名を負はさ
れてわれや來にける

膝抱きて歌をおもふは頂垂れて死をおもふよ
り少し樂しき

相模野の林のなかのひとつ家に方違へするど
とく来じかな

秋来れば羅漢顔してありぬべし命さびしきこ
とも思はず

その二

相模なる鶴間の里の佗住居ひとりずまひのあ
はれなるかな

みづからの往くべき道やいかになど案じなが
らも秋空を見る

生くること死ぬことなどを思ひぬ草木蟲魚
よりもはかなくへる

たまきはる命たまへと云ふひともなくてわが
世は生甲斐もなし

ひとりあれば心を刺しに忍び寄る何ものかあ
り秋の夜更けに

蟬のごと身も衰へてありといふ秋のあはれを
思はする文

客きたる主人のごとく人の世の秋の寒さをか
こち顔して

もの言はず何を思ふや秋の日の寂しき顔をふ
たつ並べて

かかる時突きつけられし白き刃の秀さきのご
ときひと言もがな

草と木と風とを友としてあればわが世は樂し
君とあるより

思ふことなべて違ひぬ志や大にしてせんす
べもなし

枯葉採り枯枝あつめて火を焚けばゆゑわか
くに涙あふれ來

山芋を掘りて呉れたる相模野の鶴間媼につ
があらすな

三日ほど萬葉集の歌がたりなど書き居ればこ
ころ和みぬ

遊行女うりかのわかれの歌にながしたる旅人たびとの涙わ
れもまた知る

みづからの歌にも涙落つるほど心弱くもなり
にけるかな

歌書くと筆をば取れど白絹にむかへば寒し君
のごとくに

ひとり讀みひとり思ひてあることを寂しけれ
ども樂しとぞする

夜半に起きて心に染まぬ文章ぶんしょうを書きながら聽
く秋の雨かな

空もまた悲しきことやあるならむ三日みっぴ四日よっぴほ
どを降りつづく雨

艶めきしことを書けどもこの作者むしろ寂し
き境涯を愛づ

なまなかに昔おぼえし華奢のため人の知らざ
る寂しさに居り

かへりみて胸に残るは誰々ぞ思ひ合へるは多
くあれども

われもまた艶生涯とみづからの傳には書けど
さびしわが世は

歎息が白く凍らむ日は來ともおのが心はこぼ
らすなゆめ

われもまたおぞのみやびを君とゐて手を觸る
るだに敢てせざりき

十月の八日はわれの生れし日曆を繰らば悪し
き日ならむ

世に出でて風雲の兒とならむより隠れて歌に
生きむとぞ思ふ

墨磨ればむかしの秋の匂ひしぬ消息書かでも
のを思はむ

おろかなる父もわが子を思ふときとやせんか
くやせんと煩ふ

世を棄てむ心起せど吾子のこと思へばむげに
棄てもかねつつ

その三

生死のさかひにありて、酌む酒のこの冷たさは
知る人ぞ知る

朝には生きむと願ひ、夕には死なむとおもふ愚
かなるわれ

酔へどなほ寂しきかなや思ふことなすことす
べて人にさからふ

何ごとも忘れはてむと思へども、杯取れば酔泣
ぞする

やがて死なむ身ぞと思へば、一杯の酒にも涙こ
ぼれぬるかな

わが庭はいたくも荒れぬ零落をかこちながら
も酒酌むによし

庭荒れてちろちろと蟲鳴けば酔ひつつぞ
おもふ落魄の歌

あなあはれ二十五年を酒に生き無頼の名さへ
あまんじて受く

馬道の馬樂の家にややまさる家に住まひて秋
をむかへぬ

かにかくに男のすなる好ありき女もすなる秋
となりぬる

わが床に寝れども旅寝するごとしみづから名
づく秋かぜの家

ただひとり夕餉をすと取る箸も虎杖めきて
あはれなるかな

ふと讀みし獨歩の日記に涙落つ欺くものは女
なるかな

たはむれに百蟲莊と名づけけりわれをも蟲の
なにかぞへて

秋來れば心するどく尖り來て貫きぬべし君の
胸さへ

世之介も老いては世をば寂しみぬわれ秋風を
聽くをとがむな

秋いつかわれの心を占めぬらむ身さへ澄みゆ
くここちするかな



母刀自が老いて寂しく暮らします千駄が谷を
ば思ひやる秋

この夏は吾子も日毎に遊びたる鶴間が原に秋
の風吹く

にはかにも阿夫利天狗の風吹き來大山祇よ何
を怒るや

孫悟空空を飛ぶやと思はるるばかりはげしく
走る夜の雲

わが愁林の奥のひとつ家の灯とともに消えに
けるかな

丑の刻過ぐるころまで筆取りぬ書けるは痴愚
の文字なれども

わびしやと斷腸亭のあるじにも幾年ぶりの消
息を書く

世はさびし馬樂地藏をまつる日も秋の曆のな
かに加へよ

みな人の命死ぬべき寂しさもますらをわれは
堪へて生くべし

つかれたる心をしばし休まする小夜床こよとこに似る
おん胸もがな

夜の二時に目覺めてものを思ひぬ戀をする
身にあらなくにわれ

法華經を寫すならねども書けば心あまりに
澄みてさびしき

燃ゆる時またあるべしとわが胸をいたはりな
がら秋の夜を寝る

いくたびか燃えたるのちに残りたる心の灰を
いかにせましな

戀もなき身はいまさらのごとくにも恍惚とし
て雲を見るかな

網をかくる蜘蛛のふるまひ見てありぬひとり
居なればせんすべもなく

世に出でむことも願はず秋ふかき葎の宿に酔
醜醜を酌む

いささかの濁れる酒といささかの讀むものあ
れば足るところかな

道ばたの栗を拾へば高輪の家見え八歳のわが
姿見ゆ

酒酌みて世をばののしるわが友の古袷にも吹
ける秋かぜ

眞夜中に目覺めて思ふこと多く死にかかはる
は何のゆゑぞも

無頼ともたはれをとしも言はば言へ死ぬべき
に死ぬことのみは知る

風雲の兒とならばやと思ひたることもむかし
の夢なりしかな

冷やかに笑むが習ひとなりにけり叛きそむか
れ來しがまにまに

わがこころ劍のごとく牙えて來ぬ何時誰をし
も刺さむとすらむ

やりどころなき雄ごころのゆくところ遊俠の
徒となりぬべきかな

その四

枯薄あさましき野となりにけり一月あまり旅
にのし間に

いきどほりやる方もなく朝ごとに驟えはらら
かす霜ばしらかな

みづからの數奇の生を歎くべく習ひおぼえし
歌にやはあらぬ

わが庵の爐端の酒の戀しさに旅をこそここに
へり來しかな

霜見れば年ごとに増す鬢の毛の白きをおもひ
かなしきろかも

風さむし吾子やいかにと思ひつつ煮ゆるを待
ちぬ爐の上の酒

忘れられて林のなかにわれ住めば斑猫さへもお
とづれぬかな

いそのかみ古き世よりのならはしに心弱きは
世をば遁れき

世に出づるべく阿るを敢てせぬわれはもやが
て餓ゑて死ぬべき

現身はいつかは死なむ死なばまた見がたき吾
子のいとほしきかな

鎌倉にありし日のごと犬を率てゆかばよけむ
と朝戸出をする

、長らへて何にえうある身なるらむかく思ひつ
つ今日もなほ生く

防人となりて筑紫にくだるごと心細くも相模
野をゆく

おほらかに空をながめてありなまし歌を思へ
る蟲麻呂のごと

友おほくこの世を去りし寂しさにひとりあは
れむ命ながきを

君知るや旅よりかへり来て幾日にはかに増せ
る髪カミの白さを

その五

うらうらと相模野に照る春の日もうつらふも
のかおのが身ミの如ごとく

春來とも木枯の音を聴きながら酌みしわが家
の爐酒忘るな

相模野に春は來れどもわれはもや家持のごと
は嫌を思はず

酒の香に名残り惜しめば春來れどわが家の爐
は塞ぎかねつも

酔ひ臥しの相模之介の太腹をゆらら吹き來し
ごとき春風

涙落つ林の奥のひとつ家にいきどほり酒酌む
われのため

大空に大いなる字を書かむなど狂ほしきこと
も時におもへる

志みな違へども歌詠めばおほかたのこと忘れ
けるかも

大空をながめてあればこころ足るうらうらと
照る春の日のもと

うつらうつらもの思ひるぬ奈良阪や薬師寺あ
たり歩むここに

くだつ夜の果てしもあらぬもの思ひ思ひ盡き
なばわれは死ぬべし

大寺の香の煙にあらねどもわれの思ひもあま
雲となる

雨雲とならばか遠く山越えて思へる方へい往
きながれむ

もの思ひするともよしや昨夜夢に見つてふこ
とを人に知らゆな

うらうらと照れる日のもとうらうらと君思ひ
つつ死なむとぞ思ふ

わびて住む林のなかの庵いほにも春の日かげはう
らうらと射す

おほどかに杯取ればわが春の思ひやうやく遙
かなるかも

今年こそ心の塵を拂はめと蓬生よもぎにゐて春日を
ろがむ

本来のおのが姿に涙しぬこころ弱くもなりし
ものかな

相模野も春日野となるこちしぬ旅にて逢ひ
し人を思へば

山を見て御嶽精進を思へどもそれにもまして
君をこそおもへ

遠山の消え消え雪を見るときはわれの思ひも
いつか消え消え

わが思ひかなへたまへと大山の阿夫利の神を
をろがみまつる

斑猫や道しるべせむ相模なる薄の原のなかの
わが家

日もすがら林の中をたもとほり思ふは誰が身
のうへぞそも

ひと冬を親しみし爐にわかれけり吾妹子とし
も別るるがごと

その六

相模野に来て見かへればつくづくとうき世の
風の寒かりしかな

われありき叙目に洩れて寝酒酌む相模守のご
ときここに

ほの白く胸にのこれるかなしみを心の熨と思
ひてしかな

障子紙破れて吹き入る風さむしうき消息やこ
こに張らまし

雲見れば雲とならまく水見れば水とならまく
思ふわれかも

いまだ爐も塞がで家にこもりぬ火を吾妹子
と思ふものから

わが思ひ風に吹かれて飛ぶごとし木の葉のご
ときものならなくに

かにかくに風雲の兒となるもよし世を棄てび
ととなるもまたよし

大山の雪も斑はぐちとなりけりわれの命も消けなば
消ぬがに

にこりたる酒は酌めども濁りたる世に出づべ
うも思ほえぬかな

いきどほることし絶えねば酒みづきわれ醉よめ死に
に死なましものを

醉死のいきどほり死するときやはじめて君は
涙ながさむ

われもまた丈夫なればいきどほること多にあ
れば醉死もする

冷やかに笑みてわが世を眺めるむ鳥獸戯畫を
見るがごとくに

その七

末の世のへろへろびとのなかにもむ吾と思は
ず旅にこそ往け

相模野や鶴間が原の夏草もわれの心を旅にい
ざなふ

末の世のへろへろびとは見むもうし旅にい往
きて海をこそ見め

旅を思ひ佐渡をおもへば日蓮の袈裟書戀しく
なりにけるかも

一杯の番茶に咽喉をうるほしてまた讀みつづ
く日蓮の文

わがこころうち澄ますべくそのかみの師の一
喝に似る聲もがな

みづからを忘れてあれば世は樂し心も遠く空
に遊ぶや

死ぬもよし寂しく生きてあるもよし草木のご
と相模野にゐむ

相模野のわれの庵のひとり寝の聞には夏もお
とづれぬかな

もの言はでひと日二日は過すなり身を草木と
思ひなしつ

松ばやし櫟の木立すすき原あひだに點ず小
さきわが家

朝ごとに慰め顔に縁に來てほろろと鳴くは何
の鳥ぞや

松ばやしなかに庵しうつうつと半跏を組めば
思ふことなし

笑ひきへ冷たくなりぬ身もいつか草木のごと
枯れしなるべし

夏は來ぬ大山祇よわがために涼しき風を送ら
せたまへ

相模野に歌ひてあれば吾もやがて法師蟬とも
ならむとすらむ

野路を馳せ犬と遊ぶを楽しみに日曜ごとに吾
子滋來る

犬とともに走れる吾子のうしろ影薄に消えぬ
泣かまほしけれ

この次ぎの日曜にまた來むと言ひ滋かへれば
夕さびしも

相模なる鶴間の里の夏ごもり朝餉夕餉に吾子
しおもほゆ

その八

思ふことやうやく激し相模野の庵に半跏組み
てあれども

いきどほりやや和まむと野の蚋子に血を食ま
せつつものをこそ思へ

いきどほりやる方もなく狂ほしく蛾をこそ殺
せともし火のもと

冷やかに笑みたる後におそひ來るこの寂しさを
いかにせましな

いきどほる心おさへて相模野にわれの寂しき
阿蘭若を置く

相模野の薄のみちをい往きつつひとりあはれ
む蛸子のいのちを

卷二

おなじく相模野の庵にて詠みける歌



その一

霜月の寒夜の酒もうまからず身をこそまかせ
虚無のおもひに

うつしみの腎をいとしみ薬草の連銭草を煎じ
ては飲む

爐にちかきうつらうつらのもの思ひ檢校のご
と目をば閉ぢぬれ

世はさむしわが貧しさをまたしても蔑しめた
まふ某の刀自

むらぎもの心まづしきうまびとに鶴間兔の糞
たてまつる

落魄といふにはあらね人の世を寂しむままに
落葉松を植う

すくすくと立てる櫟の枝のごと心とがれりい
かにかはせむ

相模野の薄も枯れぬ阿夫利風土にこそ吹け霜
にこそ吹け

あなかしこ鶴間が原の朝さむみ宇佐伎の命糞
まりたまふ

夜を寒み爐酒を思ふうつそみのなさけそぞろ
になつかしき如

みづからの耻をおもへば相模野の夜の爐酒も
うまからぬかな

痢を病ぬどなほ爐のうへに酒を煮ぬ死ぬとも
よしや耻おほき身は

すさまじき阿夫利風を聞きながらいきどほり
酒爐の端に酌む

憤りここだくあれどひややかに黙してあらむ
蟾蜍のごと

酒みづき酔ひてわが子を思ふ歌つくれば涙な
がれぬるかな

酒みづき相模の野邊に野ざらしとなるべき身
なり酔はしめたまへ

憤ることの寂しさ知るからにわれ相模野にこ
がらしを聴く

その二

世を棄てむ生きむ死なむと夜もなほえも安寝
せで思ひ煩ふ

かくばかり耻おほき世にわれやなほ生きて安
けくありと思ふや

しみじみと虚無の思ひの深うして生きてある
身の遺書をしたたむ

死にちかき豫感おぼえてわれの亡き後のこと
書く木がらしの夜を

ただひとり思ひ惑へばみづからの心の刺にわ
れと刺さるる

死を思ふ時しも思ひうかべぬれ犬と遊べる吾
子の姿を

大山の阿夫利の嶺のしら雪もふたたびか見む
われと思はず

いささかのことに涙落つるまでこころ衰ふ
やがで死ぬべき

吾子を思へば縊れかねつといふ歌のありしを
思ふとある夕に

しきたへの枕を濡らす夜もありきますらをわ
れも忍び歎けば

ますらはは涙な見せそ己れをばかくさとせど
もしとど泣かるる

世を棄つる時來ぬあはれ明日よりは貧道とこ
そはみづからを呼べ

眠られぬ小夜床さむし人の世の耻の衾をかづ
きてぞ寝る

かくやせむとやせむ思ひ煩へば胸こそ痛めま
すらをわれも

ひさかたの空より雨も降らなくにわが頬はい
つか濡れにけるかも

うつしみの耻にこもりてあらむより醉泣死に
死ぬがまされり

ぬばたまの夜更けて歌を思ふなり耻多き身の
こころ寂しく

末の世の末の末なるさまを見て憤り酒酌まざ
らめやも

われ死なむ否々吾子のため生きむかく惑ひつ
つ今日も日暮るる

日は暮れぬ火桶に火なしただひとり身も世も
あらぬ寂しさに居る

日暮るればひとり寂しくかこつらく落莫らくもくの身
は生きてせんなし

玉鉾たまがらの道ゆき夕占ゆづり問ふほどにますらをわれも
思ひわづらふ

相模野の葎むらの宿しゆくににごり酒酌しやくみてわが世の耻
を忘れむ

小夜ふけて落葉らくえつの音を聴くときはわがかなし
みの散るかと思ふ

またしてもうき世の寒さもたらしめて四十路よじろ男おとこ
に冬は來にけり

うち日さす都大路もえ往かざる耻おほき身を
歎かざらめや

夜ふかく思ひ惱みてあるほどに心もいつかゆ
くへ知らずも

膝組みて腕拱きても思ふことも夜毎となり
にけるかも

夜ふかく半脚を組みても思へばいのち消ぬ
がに涙あふれ來

一碗の粥を啜るもなほ生きむさはあれ難し生
くちふことは

もの言はば涙や落ちむ黙し居らばこころ狂は
むいかにかはせむ

世を狭みいぶせく籠るわがために羅漢の講を
なさしめたまへ

昨日かも吾子やは言へるちちのみの父の鬢の
毛とみに白しと

ながらへば耻こそつもれかげろふの蟲の命の
美しきろかも

祖父も父も生れたるふるさとの薩摩に往にて
世を経むかわれ

思ひあまり堪へもかねたる息吐けど鶴間が原
の雪消えずけり

斑らはだら鶴間が原に残りたる雪にかも似る
かなしみかたれ

ただひとりゆきかくゆきもの思ふ鶴間が原
に阿夫利風ふく

その三

いそのかみ古りしことごとと思ひ出でて命長きを
あはれみにけり

去年の暮に書きしかきおき取う出ては讀みか
へしつづものをこそ思へ

しれびとのいと愚かなるかきおきは落葉のご
とく焼くべかりけり

生けりともなき身のわれや己が家も鼯鼠の巢
と思ひつつぞ居る

歌屑もまじれるごときこちして寂しく庭の
塵塚を焼く

われからの落魄なればおもしろし乏しき酒錢
いかにして得む

わが庵に酒の乏しくなるままに秀歌少なくな
りにけるかな

いかづちよこの耻多き身に落ちよかくこそ祈
れ空を仰ぎて

いまさらにひとり生くるを悔ゆるほどさばか
り弱きわれと思ふや

歌反古のなかに坐りてあるときはほのぼのと
してなべて忘れつ

その一

ただひとり机のまへに坐ることひと月にして
冬去りにけり

このままに石となるべきこちしぬ膝を抱き
てものを思へば

かにかくに朴の落葉は拾へども心のおち葉拾
ひかねつも

こころやや荒しと思ふ夜はひとり自らの偈を
唱へぬるかな

世のひとは嘲みて耳をふたぐべしわれの心は
酒にかたらむ

いにしへの萬葉びとにあらねども歌をつくら
ばわがこころ足る

思ふことあまりに寂しかかる夜は落葉のなか
に埋もれて寝む

歌つくることを幸としみづからの寒生涯は歎
かずもがな

ゆく水はかへらずといふ言葉すら身にこそ染
めとひたに敷かる

むらぎもの心衰へうす日さす障子見る目もう
つろなるかも

世のひとの嘲けることゑとうちひさす都のどよ
み聽けばさびしも

ものなべて忘るる術はなきものかかく思ひつ
つ日經ぬ月經ぬ

鬢の毛もいよよ白みてうつしみのわが身もい
よよ冬さびにけり

相模野にわびしくこもるわが庵の爐の灰冷え
ぬ舍利のごとくに

人の世はなべて斯かりと思ひつつみづからさ
とす苦しと思ふな

燃えしことありやなしやと思ふほど心の灰も
冷えにけらしな

ねがはくばわが身の罪の償ひに背も砕くべう
石を負はしめ

その二

このちはいかにか往かむ生死の道をしへま
せ八ちまたの神

我鬼の忌はやうやく近しかにかくに死にたる
ものは幸なるかなや

いのち棄てむことのみ思ふもろともに死なむ
と言へる人もあらなくに

死ぬべくば眠り薬や安からむかく思ひつつ夜
ごと寝るわれ

ねむり薬嚙みてや死なむかく思へば亡き友我
鬼の姿うかび來

このままに死なばよけむと思ひつつ眠り薬を
夜ごとに嚙む

大穴牟遲神が袋を負ひたまふごとくにわれは
耻負ひてゆく

世に出づることも願はずほそほそと命の消な
む時をこそ待て

みづからの耻のかずかず數へつつみづから嘲
むおそのしれびと

夜半に起きてみづからの死を思ひつつ飲む酒
なればいとど寒しも

さびしきは夜半の酒ごとわれとわが寒き影に
も杯はさせ

うつらうつら思ひ惱めば夜ふかく長鳴鳥の長
鳴も聴く

生死のさかひを越えてながき夜のうつらうつ
らにものを思はむ

小夜ふけて眠られぬままにひとり讀む愚庵の
歌はたふとかるかな

しんしんときびしき夜半や身は遠く鬼界が島
にあるかとぞ思ふ

相模野のわが庵こひし眠られぬ夜はおもひ出
づあはれわが庵

ながき夜を眠らず何を思ふやと問ふひともしな
くひとりかも寝る

ねむられぬ夜のころの冴え冴えとあかとき
近く猿蓑を讀む

相模野の庵にみづから飯を炊くたのしさ思ふ
眠られぬ夜は

問ふひともしなればわれとわれに問ふ幾夜ね
むらずものを思へる

ねむり薬つれなく舌に觸るるなりいや寂しめ
と言はぬばかりに

うつしみの命かなしくなりにけり耻の重さを
思ひ知る時

酒の味を
体はさかたのこころの苦大苦大とあせり

卷四

さすらひの旅路にありて詠みける歌

巻四

その一

昭和五年八月、わが世の煩ひを忘れむとして、浪速津より遠く四國路へかけての旅に出でぬ。さすらひの身の夜ごとの夢の愉快たりしこといまに忘れず。

何ごとも忘れはてむとあはれなる四十路男は
またも旅ゆく

その男ゆくへ知れずとになりきと明日の噂
にのほらむもよし

身は雲に心は水にまかすべう旅ゆくわれをと
がめたまふな

世も吾も棄ててか旅に出でなまし苦しき時は
かく思へども

妻わかれして友住まずなりしより秋はやく來
る岡本の里

消息は一行にしてこと足らむ思ひは文字に書
きがたきかな

わが旅は銀座の夜の好ありきよりやや長きも
のそこそ思へ

世之介の好ありきよりやや寂し浪華の旅のそ
ぞろありきも

君住めばいとなつかしく聴こゆるよむくつけ
き名の武庫の郡も

富田屋におせんのおたる昔より尻長酒はせん
すべもなき

肱曲げてひとり寝る夜も重なりぬ今世之介の
あはれなるかな

去年の夏の六甲ゆきのおもひでも今ははかな
と言ひて酔ひぬる

わが著るは紅蓮の翁の古裕にも似るものか旅
ゆくによし

防人に召されて筑紫くだりする東びとめく寂
しさに居り

伽羅の香もいつか忘れぬ旅ゆけば蓬の香など
なつかしきかな

樊噲と呼びしむかしの友に會ひ旅おもしろく
なりにけるかな

寂しさに胸曇らせてあるもよし旅にして見る
秋空のごと

旅に寝て秋風聽けばふと思ふ榛禮吉の戀やい
かにと

さすらひぬむかし明石の入道の娘を戀ひし人
のごとくに

そのかみの酒場の猛者もおとろへてゆくへも
知らぬ旅に出でける

從兄弟等とあそぶ滋のあはれさを秋の旅寝の
夢に見るかな

その二

昭和六年五月、われはじめて土佐の國に遊び
ぬ。海は荒かりしかども空あかるく、風光の
美そぞろにわれの心を惹くものありき。かへ
りてのち興のおもむくままに「土佐百首」を
つくりしが、ここにはその半ばをば撰びつ。

ひむがしへ吹きゆく風よ浪速津をいま船出す
と吾子に告げ來ね

土佐の海いや荒ければさすらひの船旅びとは
酒精進する

わだつみのちぶりの神に船ながら酒を手向け
て土佐へ來にけり

かにかくに海の荒きもこころよし世をいきど
ほり旅をゆく身に

あやふきはわが乗る船にあらずして遠る人
の心なるべし

海見ても命棄てまく思ふてふ旅の心はあはれ
なるかな

ほのあかき珊瑚珠なす唇の土佐の娘子を戀は
さらめやも

まづわれにうま酒の樽を送り来て酔へよとぞ
言ふ土佐の友かな

うま酒に酔ふともよしや大土佐の山をこそ見
め海をこそ見め

大土佐の海を見むとてうつらうつら桂の濱に
われは來にけり

土佐の海を見ておもへらくむしろわれ勇魚取
りともなるべかりけり

勇魚取る身にはあらねどわれもまた荒海遠く
往なむとぞ思ふ

海を見てふと思ひ出ぬ亡き父はいさな船ひと
う持ちておはしき

いにしへの建依別の裔にして酒をつくれる友
はかしこし

土佐の海とどろとどろと鳴る夜半に酌みたる
酒をえこそ忘れね

大土佐の海にただよひるごとくたんたり
やと酔ひにけるかも

室戸にて拾ひし貝は伊佐奈神がわれに賜ふて
ふめづらしき貝

大土佐の室戸の沖に立つといふその龍卷の潮
ばしらかも

はるばると室戸岬にわれは来ていきどほろし
く荒海を見つ

うばたまの黒き湖のひたはしる大土佐の海に
夏は來にけり

たたなはる岩の間をゆくほどに灌頂が濱に出
でにけるかも

はるばると遠るる人を思へばこそしみじみ句
へ室戸たちばな

空海が修法の洞の窟もり古蝙蝠にものを問ひ
そね

思ふこと遠く遙けくなりけり室戸の濱をと
ゆきかくゆき

室戸より足摺かけてわだつみのゆたのたゆた
に勇魚遊ぶも

空海が大ききみ足のあとも見る室戸岬のたちば
なの道

室戸なる月見が濱のしら砂を小夜床としてひ
と夜かも寝む

薩摩より吹き来る風とおもへばかこの海風の
なつかしきかな

かしこしや室戸岬はそのむかし大師の獨鈷の
落ちたるどころ

友酔ひて土佐の昔をかたるかな長曾我部とも
告らまほしげに

八月の志那禰祭を見にゆかむかねごともしつ
土佐はなつかし

土佐の海の浦戸御壘瀬の幾うねりうねのまに
まにゆけばおもしろ

土佐の神一言主のみことにも酒をささげて君
をことほぐ

土佐橋の錢屋の庭のいそのかみ年ふる苔のな
つかしきかな

奈良志津や富津わたりの舟のごとわれの心は
波にただよふ

杯の大いなるをば友は愛づ勇魚やうかぶここ
ちするらむ

人間のまことの姿もとめつつ土佐のひと夜を
元親記讀む

みづからを塵泥のごと思ひなしあればをかし
や土佐の旅寝も

瀬は魚をぞまつるわれもまた伊佐奈神をばま
つり申さめ

薩摩鴻より吹ききたる風ならめ叔父の柑子の
山の香ぞする

つるぎたち土佐はよき國勇魚さへいとおほら
かに海に遊べり

あさみどり夏近ければほととぎす高知の城を
鳴きて過ぐらむ

うらうらと日の照りわたる大土佐の七つの郡
夏立ちにけり

つるぎたち土佐にきたりぬふるさとをはじめ
てここに見たるここに

忘れめや明日はわかれといふ朝の巴堤とまづつみの雨の
ほそさを

貫之つらゆきが土佐日記にもはかなげにしるしてあり
き船のわかれを

その三

昭和八年二月、越後路を経て北陸に遊ぶ。き
さらぎ半ばの頃なれば、残雪は斑らに凍り、
四五子と行をともしたれども、猶寂寥に塔
へざるものありき。

きさらぎの夜天てんに旅を思ふところ老子莊子に
したしむところ

きさらぎの旅ごろも着て蕉風の俳諧道の寂し
さも見む

旅ごろも土に兔の糞凍る相模野野みち踏みて
往かばや

旅ゆかば空しくならむわが庵を阿夫利天狗よ
守らせたまへ

しんしんと雪降るけはひおほえつつ清水峠を
夜半に越ゆるも

越後路やさすらひ來れば空さむみ米山おろし
雪を吹く見ゆ

雪見ればかなしみいとど堪へがたし越物語吾
にも書かしめ

かにかくに越路の友はおもしろし待ちねと言
ひて蟹下げて來ぬ

長岡の浩然法師わがために酒托鉢をしたまひ
しかな

醉臥のいたづら臥のひとり臥黒部の峽にひと
夜寝にける

旅まくら蘆原の夜の酒さむく冬いかづちも鳴
り出でにけり

鳴り出でし雪雷を聴きながらきさらぎ蟹の甲
に酒煮る

雪空に雷鳴ればわが胸もとどろとどろと鳴り
出でにけり

雪空に踏みまよひたるはたた神天くだりませ
酒を酌まむに

酔ひて聽けば雪空に鳴るいかづちのをどけ太
鼓の音もおもしろ

雪雷やうやく遠しいま鳴るは東尋坊のあたり
なるべき

いにしへの物語めき加賀の國蘆原の里に降れ
る大雪

西御坊歌びとわねもかしこみて蓮如の御像を
ろがみまつる

聖蓮如ひらきたまひしおん寺に來ればかそけ
し松風の音

きさらぎの風寒ければ三國なる汐見櫻はいま
だふふまず

丹後路をながされ人のごとくゆく連兄麿にも
あらまくにわれ

われをかし紙魚のたぐひにあらなくに丹後風
土記のなかをさまよふ

わびしくも胸にこそ積み丹後なる與謝大山の
雪に似しもの

丹後路の旅に讀まむと思はめやあはれ吾妹子
先生の歌

元義の吾妹子歌を讀むほどに旅の寂しさを忘
れけるかも

丹後なる桑飼村はかしこしや與謝野の大人の
生まれましし里

與謝の海阿蘇の海越え楫まくら宮津がよひを
するは誰が子ぞ

ひさかたの天の橋立ここに来てあはれとぞ思
ふ小式部の歌

なにがしの丹後守の髭黒の顔も吹きけむ與謝
の海かぜ

たまきはる命も消なむひそかなる思ひ湧きた
り楞嶺の雪

縮緬の祭見に來と書きおこす丹後だよりも待
たれぬるかな

城の崎のゆとうやに来て思ふかな堅結ひ癖の
妹の下紐

曼陀羅湯の名さへかしこしありがたき佛の慈
悲に浴むとおもへば

城の崎の方壺の家の山陽の字にまづわれは酔
ひにけるかな

わが寝處を去りそねといふをみなごにその名
を問へば鹿猪とこそ告れ
うつせみの妹の八十言いとへばかわれやさび
しく旅に出でつる

その四

昭和八年四月、われふたたび北陸にあそぶ。
多く蘆原の湯の里にありて、うつりつたる日
を送るうちに、ひと日機縁ありて、曹洞第一
の道場吉祥寺永平寺に詣でぬ。

いまもなほ吉祥山の奥ふかく道元禪師生きて
おはせる

おん授戒明日よりといふ山淨めわれはも塵の
ひとつなるべし

縁ありて曹洞一の道場の羅漢の講に會はむ日
もがも

もろこしの天童山をさながらの山ありがたく
をろがみまつる

ここに來て歌を思へばいつとなく禪のこころ
となりけるかも

一口なほ一切惡を斷つといふ御齋かしこと食
しつ申さく

山に來て知るひとに會ふうれしさよ大人と吾
を呼ぶ法師廉芳

廊さむし消殘りの雪まだらなる東司の裏の苔
ふかき庭

おのづからおこる風あり翠雲のゑがきし松も
揺れてこそ鳴れ

廊の板つめたく踏みて大衆の通りしあとの松
風のおと

老猊^{らうし}下^げおはしまさねば道場^{だうじやう}の春^{はる}いやさらに寂^{さむ}
しきものを

會^{あひ}へばみなねもごろに禮^{らい}してゆきぬ布薩^{ふさく}の式^{しき}
の時^{とき}のごとくに

刻^{とき}ならねば堂^{だう}に人^{ひと}なく山^{やま}のかぜ空^{あか}しき猊座^{しざ}を
しめやかに吹^ふく

永平寺^{えいへいじ}貫首^{くわんすう}猊下^{しげ}よわれの持^もつ虚無^{きよな}のおもひを
いかにせましな

越路^{えちろ}がた志比谷^{しひや}の里^{さと}をたづね来て杉^{すぎ}のしづく
に立ち濡^ぬれぬわれ

おん齋^{さい}とともに賜^{たま}びたるおん珠數^{しゆず}のつぶらつ
ぶらにもものを思^{おも}はむ

その五

昭和八年六月、小杉放庵氏等とともに、越後路より佐渡が島に遊びたる後、われひとり、さらに信越二國のあひだにさすらふこと二月あまり、流離のおもひに骨も瘦せける。

旅に出づ涙を酒にまぎらしてあるもよけむと
思ふまにまに

わがこころ吾のみ知るてふことはりを今さら
知りて旅にい往くも

往ぬべきは往ねしかすがにいささかの愁ひを
持ちて旅に出でける

いにしへも西行といふ法師ゐてわが世はかな
み旅に出でにき

鳥が鳴くあづまの友しこと問はば新潟古町練
るとつたへよ

もの思はず杯取りて膝組みて太腹撫でてあり
ぬべきかな

痢を病んで矢筈草をばさがすなり越の水無月
雨に乏しく

酒荒く心すさみぬいかにせむ救はせたまへ伊
夜日子の神

丁々と樽ぎぬた打つひびきをほ耳に残りてね
むりかねつも

海にして彌彦の宮ををろがみぬ何をか祈る山
禰宜のごと

ふたたびは見じと思ひし人に逢ふごときここ
ちに佐渡に来しかな

自蓮の消息の字に似るものか檀特山にかかる
横雲

天地をなげき乞ひ請み大佐渡の迦具土の神を
をろがみまつる

みづとりの加茂のみづうみ風寒くますらをわ
れも酒欲りにけり

加茂の湖はやがて暮るれど山のうへの阿羅々
仙めく雲はうごか

見はるかす佐渡の荒海日の落つる方鞆鞆の空
をこそおもへ

海ゆけば佐渡はおもしろまさら川大ざれ瀑も
船ながら見つ

二つ龜七瀬八つ浦おだつみのゆたのたゆたに
船はい往くも

おもしろし佐渡のはづれの海なかの牛わたり
岩を牛のわたれる

さびしやと思ふわが目に残りぬ船を見送る
佐渡の鶴の鳥

船に乗れば涙わりなくいにしへの佐渡の帝を
かなしみまつる

おほけなく順徳といふ名を負へる船にわかれ
ぬ佐渡のゆふべを

佐渡はよし日蓮の世のごとくにも檀那おはせ
る河原田の里

いまもなほ逢ふかどぞ思ふ眞野あたり佐渡の
帝の下蔭雑仕に

瑠璃堂の薬師如来の眉に見ぬうつし身ならぬ
もののはれを

蓮華峯寺丹碧のいろいや古く離々たる草のい
とほしきかな

吾子を思へば悔し善知鳥を祀りたる社とけだ
し知らで過ぎ來し

放庵は金北山へのぼるなりわれこそは取れ大
きさかづき

わが友が金北山の初山に採りし石楠花ゆるが
せにすな

大佐渡の高千のみちにゆきあへど法華道者は
もの言はずけり

佐渡に来てふとおもへらく養笠の長塚節來し
は何時ごろ

いにしへの安宿王もわれのごとさすらひの身
を歎きけらしも

佐渡に来て命棄てまく思ふ身を羽黒權現救ひ
たまへや

眞金ふく佐渡の白石吾妹子のこもらふ家の屋
根や葺くべき

鞆の風をさかなに酒酌めば千疊敷も廣からぬかな

放庵が巖をうつすしばらくを宿根木の瀬に船がかりする

五十猛命いそたけらみことの社をろがみてわれも雄ごころおぼえてしかな

あからひく酒やけ胸の荒翁あらかみ小木こぎのうま酒飲めと宣らしぬ

箭島なる竹の葉音のさらさらにあふたたび妹を見むとおもはず

雄ごころもなさけにあへば撓むべし佐渡の眞竹のなよ竹のごと

おもしろき佐渡の白石浪来ればこほろこほろ
と高く鳴るかな

佐渡が島ふたび見むと思はねどふたびか
見む人をしぞ思ふ

今はしも世をば棄てむと思ひつつ佐渡が島根
に旅寝するかも

佐渡が島わが世を愛しと思へばか鶴の住む磯
もなつかしきかな

いたはしと帝を思はば焼枯れぬともまた咲け
よ佐渡の梅の木

空海のみ足のあとのかしこさを思ひつつ寝ぬ
出湯のひと夜を

書きさしのわが文がらも飛ばすなり天狗風め
く出湯のだし風

人の世のけがれを怒るとくにもはたた神鳴
る妙高の山

みすずかる信濃路に来て星まつる夕にあひぬ
旅はさびしき

いつ果つる旅かは知らねみすずかる信濃の山
にひと夜寝にける

生死せいじのあひだの旅にさまよへるおのれかなし
み信濃路に來ぬ

はかなしやゆくへも知らぬさすらひの旅の塵
にも似たるわが歌

その六

昭和八年八月、われは信濃の山を下り、木曾路を過ぎて京阪に出で、さらに遠く海を越えて四國にわたりぬ。伊豫を経て土佐に入り、菫生の山峽猪野々の里に淹留することおよそ三月、都にかへりしは秋既に深き、十月半ばのことなりき。

旅のうれひいよいよ深くなるままに土佐の菫生の山峽に來ぬ

いつはりの世に出でむより大土佐の菫生の峽にこもるまされり

ふたたびは世に出でじなど思ひつつ菫生の峽にひとりこもらふ

物部川山のはざまの風さむみ精靈蜻蛉飛びて日暮るる

山ふかき猪野々の里の星まつり芋の廣葉に飯
たてまつる

葦生路をわが越え來れば峽ふかく水浴べるひ
との黒髪も見ゆ

猪野澤の出で湯かしこみ足病みの永瀬の爺や
ふたたびも來し

いかづちはとどろ鳴り出づありがたき志那禰
の守りゆるがせにすな

はたた神いきどほろしく鳴り出でぬいまこそ
酌まめ酒麻呂の酒

いきどほろしき心を持ちて酒麻呂のつくれる
酒は酌むべかりけり

ここはしも猪野々山里訪ひ來とも伊野部酒麻呂妹を欲りそね

ふたたびか都にい往き秋津羽の袖振る妹を見むと思はめや

いついかにいづこに死なむいのちぞと思へば猪野々の旅寝かなしも

雅澄はまことますらをたはれをの名に立つわれやひとり耻づらく

おのづから仙となるべきこちして面河の溪をとゆきかくゆく

谷ふかき苔のかけはし踏みわけて寒山や來る拾得や來る

あかつきの霧に目ざめてたそがれの雲に寝る
なり魚梁瀬大杉

ひさかたの天そそり立つ杉むらを大山祇よ守
らせたまへ

沖の島なつかしければ荒海もものかはと越す
旅びとわれは

土佐ぶみにまづしるすらくこの日われうれし
きかもよ叶崎見つ

われをしもな忘れそよなつかしき大土佐の山
大土佐の海

われ紀氏の裔にあらねどいにしへにまして歎
かる土佐のわかれに

かにかくに友はうれしも別れ酒伊野部酒麻呂
酌めともて來ぬ

末の世の歌びとわれもまさまさと目にこそ
こせ雅澄の墓

わが思ひなほほのかにも残りるぬ室戸足摺岬
みさきに

忘れめや土佐の葦生の峽ふかき猪野々の里の
ありあけの月

土佐の海のゆたのたゆたにただよひていまか
別れむ旅びとかこれ

その七

昭和九年三月、旅どころ止みがたきままに、
信濃路より名古屋に出でさらに但馬の國城の
崎に至る。近くに應舉寺となんよべる寺あり
ければ、心ひかるるままに往きて詣でつ。

夜をこめて酒をこそ酌め城の崎の方壺の家の
尻ながの客

かにかくに旅のあはれをさそはれぬ辛夷の花
の白きゆふぐれ

友の死の知らせかなしく城の崎の辛夷の花の
散るをわが見し

しみじみと辛夷の花をながめつつ友のい往き
し涅槃を思ふ

應舉寺の石のきだはしのぼりつつ消残る雪を
しみじみと見つ

源の應舉の描きし孔雀の尾いつしか延びてわ
が胸に觸る

古びたる襖の孔雀見るときは墨にもいのちあ
りところを思へ

幽かなる松風の音聴こゆなり應舉の墨繪見つ
つし居れば

應舉寺の眞晝のどかにふすま繪の孔雀あそべ
り松に巖に

なつかしき友のおもかけ見出して羅漢屏風の
まへにたたずむ

猿まともなりしここに今日ひと日われや羅漢
とともに遊ばむ

但馬路の春早うして襖繪の吳春ごしゅんの梅も咲きに
けるかな

ころころと遊べ狗ころころと吳春の繪よ
りぬけ出でて來よ

繪とはいへかばかり美しき波ならば吾も水禽
とならましものを

小襖の石榴せきじゆの實も熟れにけり應舉の筆の奇し
さいみじさ

ゆめさらに繪とはおもはじむらさきに葡萄熟
れたりかもせうま酒

枇杷の實も應舉描けりとおもふときひとつび
とつに胸もこそ鳴れ

常信の卷狩の繪のたうとさに涙ながしぬ旅び
とわれも

常信の古き繪屏風見てあれば旅の愁ひもいつ
か忘るる

その八

昭和九年四月、われふたたび土佐に入りぬ。
山嶮しく海荒しといへども、この地の人ごこ
ろの直ぐなることは、げにうるはしき埴安の
郷のこちこそすれ。片雲の風にこそはるる
身も、いでやここにささやかなる蘆を結ばめ
と思ひ定めぬ。

四國路へわたるといへばいち早く遍路ごころ
となりにけるかも